

---

# 月に登った三人

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

月に登った三人

### 【Nコード】

N1585D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ハンガリー動乱直後のハンガリー。ソ連軍の横暴とそれに屈する祖国に嫌気がさした三人はこの国を去ろうとするがその方法は。現代のファンタジーです。

## 第一章

### 月に登った三人

ハンガリーという国は二十世紀にかなりの苦勞を経験した。第一次世界大戦でオーストリアと別れその時も苦勞があつたが第二次世界大戦ではドイツとソ連の間で塗炭の苦しみを味わつた。東部戦線においてはこの国は激戦地の一つであつた。

首都ブタペストは両軍の死闘の場となり廢墟と化した。その後ソ連の介入で共産主義国家となつたがソ連の圧政は続きそれから必死に逃れようとした。

それで起こつたのがハンガリー動乱であつた。命懸けで起こした運動だつたがえなくソ連軍を中心としたワルシャワ条約機構軍により鎮圧された。この時多くの血が流れた。

この時こんな話が残っている。日本の大内兵衛という『偉大な』マルクス主義経済学者が世界という雑誌で堂々と言つた言葉だ。

「ハンガリーは百姓国ですから」

これは本当に言つた言葉である。呆れる他ないが当時の日本の学者というものはソ連を賛美していればそれでやっていけたのだ。少なくとも教育や経済、歴史、哲学ではそうであつた。命懸けで運動を起こした人達をこうして罵りソ連という全体主義国家を擁護していたのが我が国の『良識派』であつた。政党で言えば社会党がそうであつた。彼等にしてみれば赤旗さえ振つていればそれが正義なのだ。所詮良識も正義も作り出されるものであるがそこには卑しい人格や行動、発言も混じるものだ。こうした輩が堂々と大手を振つて歩いてしかも責任ある立場にいたという怪奇現象が起こつていたのは当時の日本の学者のレベルの低さを表わす一つの指標であろう。

その動乱の後のハンガリー。この国はまだ軍が残つていた。言うまでもなくソ連軍である。

街には戦車が走り武装した兵士達が巡検している。見事な『平和

勢力』の軍隊であった。

「くそつ」

ブタペストの市民達は彼等をみて影で忌々しげに舌打ちする。

「さつさと帰りやがれ、露助が」

「全くだぜ」

三人の若い男達がアパートの一室でビールを片手に愚痴をこぼしていた。

「俺達は御前等の奴隷じゃないんだよ」

「俺達はハンガリー人だ」

口々に言い合う。ソーセージを口に放り込む。

「そもそもよ」

「ああ、わかってるさ」

青い目の青年ダルビに金髪のクリストフが頷く。もう一人は顎鬚のバーンであった。

「ビールもソーセージもまずくなったよな」

「そつだよな」

バーンがクリストフの言葉に応えた。小さな木製のテーブルの上に置かれているそのソーセージは何か色もよくなかやけに小さかった。

「昔はもつと上手かったよな」

「ああ」

彼等は口々に言い合う。

「何か今の体制になってからな」

「急にまずくなった」

「何が理想の主義だ、理想の経済だ」

ダルビは酔いに任せて言う。

「全然違うじゃねえか」

「おい」

声が大きく荒くなった彼をクリストフが制止した。

「外に聞こえるぜ」

「おつと」

ダルビは彼の注意を受けて慌ててすぐ側の窓を見下ろした。幸いそこにはソ連兵は通り掛かってはいなかった。

「アパートの中は大丈夫か」

「今いるのは俺達だけさ」

バーンが面白くないといった感じで答えた。

「皆憂さ晴らしにパブに行ったださ」

「イワン共がいないパブにか」

「そうさ」

ハンガリー人も酒が好きだ。そこで憂さを晴らすのは彼等も同じである。もつともロシア人も酒は好きなのでわざと彼等がいないような店を選んでいるのだ。

「そこでな。皆飲んでるさ」

「皆同じなんだな」

ダルビはそれを聞いて思わず苦笑いを浮かべた。

「今が最高に面白くないのは」

「正直逃げたいさ」

クリストフは苦い顔をして述べた。

「今のこの国には。何の未練もないさ」

「ないか」

「じゃああるか？」

ダルビだけでなくバーンにも問うた。

「今のこの国に。イワン共に好き放題されてるこの国によ」

「それはな」

二人共その答えは決まっていた。ビールの味がさらに苦くまずいものになるのを感じながら言うのだった。

「今はないな」

「ないか」

ダルビはわかっていたとはいえバーンの言葉に落胆した顔になった。

「やっぱりそうか」

「昔はあつたのにな」

クリストフは俯いてこう呟いた。

「今は完全になくなつたな」

「亡命でもしたいんだがな」

ダルビはかなり危ない言葉を出した。これは周りにいる蓋衛を信頼しているからこそその言葉だが流石に二人もこの言葉には目を剣呑にさせた。

## 第二章

「それあまり言わない方がいいぞ」

「そうだ」

バーンとクリストフはそうダルビに告げた。

「何時何処に密告者がいるかどうかわからないぞ」

「それを忘れるな」

「それで全部イワン共のせいだよな」

だが彼はその言葉にさらに機嫌を悪くさせるのだった。

「KGBがブタペストにもいやがる。同じマジャールでも互いに密告し合うしよ。何て嫌な国になっちまったんだよ」

「当たり前だろ。ここは何だ？」

クリストフはダルビに問うた。

「ソビエト社会主義共和国連邦の中のハンガリー共和国さ」

ダルビは口の右端をシニカルに歪めて答えた。

「それ以外の何でもないさ」

「そうさ。だからそれも当然なんだ」

「俺達には主権も自由も何にもないんだよ」

「大嘘つき共が、こんなのが理想国家であつてたまるかよ」

バーンの言葉も聞いたうえでたまりかねてまた言った。

「やっぱり亡命だよ、もうこんな国に未練はねえよ」

「亡命か」

「ああ。何処かに行こうぜ」

たまりかねてだったが決意は強かった。彼は他の二人にあらためて提案するのだった。

「それでいいよな」

「けれど。何処に行くんだよ」

バーンは現実的な話をしてきた。

「亡命といつてもな」

「そうだな、問題はそれだ」

クリストフは腕を組んで思案する顔になっていた。その顔でダルビにまた述べた。

「今ここはあちこちにソ連軍がいる。密偵もうようよしているぞ」

「さっき言った酒場もどうかわからないのが現実だしな」

「そうだよな」

ダルビは二人の言葉にまた顔を暗くさせた。

「結局はそうか」

「そうだよ」

「大使館前とかなんてそれこそな」

二人はまたダルビに告げる。

「下手な動きをすればイワンの銃で蜂の巣だ」

「それこそ天国に亡命だぞ」

「ちっ」

二人の言葉を聞いて今度は舌打ちをする羽目になった。

「何だよ。全然駄目かよ」

「少なくとも今はな」

クリストフはまた言う。

「とても無理だ」

「それどころかブタペストを出ることすらな」

「参ったな」

バーンにも言われて。彼も腕を組んで考える顔になってしまった。

「じゃあどうすればいいんだ」

「諦めるっていうのがこうした時のパターンだが」

「どうだ？」

「そんなのは言わなくてもわかるだろ」

ダルビは二人に何を今更といった調子で言葉を返した。

「諦めないさ」

「やっぱりな」

「じゃあ蜂の巣か」

「俺はまだまだこの世の中を楽しむんだよ」

シニカルというか自嘲気味な調子の二人に言い返した。

「誰が天国なんかよ。しかもイワン共に天国も地獄もねえよ」

「そりゃそうだ」

その言葉にバーンが頷く。

「あいつ等のいる場所そのものが地獄だしな」

「神はいないそうだしな」

クリストフが何を言っていていやがる、といった顔を見せた。言うまでもなくソ連は共産主義国家だ。共産主義は宗教を否定している。

これは表向きは宗教はまやかしたというのだがその実際は違っている。共産主義以外の考えを認めていないだけである。これが共産主義というものの実態だ。なおこれはフランス革命のジャコバンからはじまっている。共産主義は今ではナチズムと同一視されそのルーツも言われているがそれはジャコバンである。ナチスもソ連も二十世紀に復活したジャコバン派だったというわけである。

「何処までもいけ好かない奴等だ。だから奴等のいない場所に行こうぜ」

「じゃあ何処だ、そこは」

クリストフが問う。

「ここから出られないのに」

「上にも行くか」

酒に酔ったついでに思いついて述べた。

### 第三章

「上にな」

「上!？」

バーンは今のダルビの言葉に眉を顰めさせた。

「何処なんだ、そこは」

「とにかく上なんだよ」

自分でも思いつくままに言葉を続ける。だからこれといって考えはない。

「それでいいだろ」

「上っていうとあれか」

クリストフはビールを飲みながらダルビに尋ねた。

「月か!? ひよつとして」

「ああ、あそこがあつたか」

何と言われてそう返すのだった。実にいい加減だった。

「じゃあそこにな。行くか」

「月か」

バーンはそう言われて考える目になった。彼はソーセージを食べ  
ている。

「悪くないかもな」

「言われてみればそうか」

クリストフもそんな気になってきた。

「少なくともイワンも理想の思想なんてのもないしな」

「じゃあ決まりだな」

ダルビは二人も乗り気になってきたと見てまた声をかけた。

「月に行くぜ」

「それはいいけれどな」

クリストフは彼に問うた。

「どうやって行くんだ? 月なんか」

「梯子を使えばいいさ」

「梯子をか」

「ああ」

そう答えるダルビであった。

「それをアパートの裏の大きな樹にかけてそれでな」

「それで行けるかね」

「大丈夫だろ」

ダルビは何も考えずに言う。

「試しにやってみればいいさ」

「ううん」

「まあ失敗してもクダ巻いて飲むだけだ」

バーンは達観して述べた。

「それだけだしな」

「それだけか」

「ああ、それだけだ。もう失うもんなんて俺達にはないしな」

これは事実だった。それだけ先の動乱が彼等の心も何もかも打ち砕いてしまったということであった。かなり自暴自棄にもなっていたのだ。

「失敗したらしたでいいだろ」

「それで行ければそれに越したことはないか」

クリストフもそう考えることにした。

「わかった。じゃあそれでやってみるか」

「よし、今夜だ」

ダルビはそのままの勢いで決定した。

「もうそれでいいな」

「随分気が早いな」

「じゃあ何時がいいんだよ」

そうクリストフに言い返す。

「どうせこれ以上いたくないんだろ？ここに」

「まあそうだな」

バーンも同意して頷く。

「俺もそれで賛成だ」

「何だ、御前もか」

クリストフはバーンもダルビに賛成したのを見て困った顔になった。だがもう選択肢はなくなってしまったのだ。こう言っしかかなかつた。

「じゃあ俺もな。今夜だな」

「ああ、行くか」

「よしっ」

こうしてまずは夜を待つことになった。その夜になると三人はまず月を確かめた。見れば三人の願い通り見事なまでの満月であった。

三人はその黄金色の満月を満足した顔で見っていた。クリストフも結局はそうした顔になっていた。それを他の二人にからかわれてしまった。

「おいおい、楽しそうな顔になってるな」

「別にいいだろ」

苦笑いを浮かべてバーンに応える。

「俺だつて行きたいんだしな、やっぱり」

「よし、じゃあ決まりか」

ダルビはそれを聞いて遂に梯子を出してきた。それはかなり長い梯子であった。

## 第四章

その梯子を前に出して言っていた大樹の方に持って行く。見れば見る程大きな樹であり見上げるだけで首が疲れてくる程である。

「本当に大きいな」

「そうだな」

三人はその木も見ている。本当に月に届きそうだな。

「これでよしだ」

「もういいのか」

「ああ」

ダルビは梯子を樹にかけてから二人に告げた。

「これでいいぜ」

「さて、後は登るだけだな」

バーンと言った。

「この梯子を」

「そうだな。登ればいいんだ」

ダルビはまた答える。

「それだけでいいからな」

「最初は誰にする？」

クリストフはまだ樹を見ている。樹を見たまま二人に述べる。

「登るのは」

「誰でもいいだろ」

ダルビはこれに関してはかなり適当であった。そこまで考えてはいなかったのだ。

「正直言っつてな」

「誰でもいいのか」

クリストフはそれを聞いてどうにもといった感じで首を傾げた。

「じゃあ俺でいいか？」

「俺は別にいいぜ」

ダルビはそんなことはどうでもよかった。だから何の意味もなく頷いてみせた。

「誰でもな」

「御前は？」

「俺もな。別に」

バーンもそれは同じだった。

「三人しかいないしな。結局は」

「そうだよ、三人しかいないんだよ」

ダルビもそれを言う。それで特に焦ってはいないようであった。

「だから焦ることもないさ」

「そうだよ。じゃあさ」

バーンはダルビの言葉を聞いてからまたクリストフに告げた。

「最初に行けばいいさ」

「ああ、じゃあそれでいいな」

クリストフは二人に言われてそれを受け取った。

「俺が行くな」

「ああ」

「それじゃあな」

クリストフは梯子に足をかけた。そうして登りはじめる。

それにバーンが続いて最後にダルビが。一歩ずつしっかりと進んでいるとやがてそこにソ連軍の兵士達がやって来た。

「あいつ等何をやってるんだ？」

「おい、御前達」

兵士達を率いている将校がハンガリー語で三人に声をかけてきた。見れば厳しい顔をしておりかなり偉そうだ。如何にも侵略国家の軍人といった感じである。少なくともソ連が『平和国家』などではないのはすぐにわかる顔をしている。もっとも当時からソ連や共産主義勢力を『平和勢力』だの『平和国家』だの言えるのはかなり歴史や国際政治がわからないか特定のイデオロギーを妄信しているか特定の勢力と結託しているかであるが。いずれにせよ碌なものではな

いのは言うまでもない。

「何をしている」

「月に行くんだよ」

ダルビは将校に顔を向けて答えた。上から見下ろしていると随分小さく見える。あの威張り散らしているソ連軍の奴等もこんなに小さいのかと心の中で思う程であった。

「今からな」

「馬鹿な話だ」

将校はそれを聞いてすぐに三人を嘲笑うのだった。

「そんなことで行けたら誰も苦労はしない。月は我々のものだ」

「おいおい、また随分と欲張りだな」

クリストフは将校のその言葉を聞いて苦笑いを見せてきた。その苦笑いははつきりとソ連軍の者に対する侮蔑があった。

## 第五章

「ハンガリーだけじゃなくてお月様まで好き勝手にするつもりか」  
「何処までも共産主義で赤く染めるだけだ」

この将校は少なくとも共産主義に対する忠誠は強いらしい。

「ハンガリーや月だけではないわ」

「勝手に言ってるんだな」

バーンも流石に彼等には侮蔑の色を隠せなかった。傲慢な彼等に對しては。

「そんな戯言をな」

「迷惑かけるのはせめて地球だけにおけよな」

ダルビは彼等にも当然のように容赦がなかった。

「いい加減にな。ほら」

そのうえで他の二人に声をかける。彼が最後だったのだ。

「早く行ってくれ。そのままな」

「ああ、わかった」

「それじゃあな」

クリストフとバーンはすぐにその言葉に頷いた。

「おい、素晴らしいソ連軍の方々」

「特にそこの偉い将校さん」

思いきり彼等を見下ろして言う。

「これでお別れだよ」

「それじゃあな」

「隊長」

そのまま上へ上へと進む三人を見ながら兵士の一人が将校に對して声をかけてきた。

「どうぞされますか？」

「構わん」

彼は最初から三人を頭から馬鹿にしていた。だからこそその言葉で

あつた。

「好きにさせておけ。行ける筈がない」

「左様ですか」

「非科学的だ」

科学を万能と考える共産主義らしい考えであつた。

「こんなことができるわけがないではないか」

「それでは」

「落ちて痛がつているところを笑ってやれ」

傲然と言い放つた。

「わかつたな」

「はい。それでは」

兵士はそれに敬礼で応えそれで終わった。彼等は命令通り動かすに見ているだけであつた。だが三人はそれでも進むのであつた。

「どうなるか」

「どうせ落ちるに決まっているがな」

だがクリストフが梯子の先に着くと。そのまま消えてしまったのであつた。

「なっ!？」

「まさか」

続いてバーンも。最後にダルビも。三人はそのまま月の中に消えてしまったのであつた。

「馬鹿な」

将校も兵士達も今更のように驚くのであつた。

「まさかこんなことが」

「梯子で月に行くなぞと」

「おい」

将校はすぐに兵士達に声をかけた。

「は、はい」

「よいか」

そしてまた命令するのだった。

「試しに登ってみる。いいな」

「わかりました」

「それでは」

兵士達は命令に応える。そうして残された梯子を先の三人と同じように登ってみるが。だが月にはとても行けず梯子の一番上で止まるだけであつた。

「無理です」

「あのようには」

「どうということなのだ？」

やはり月には行けないのを見て困惑する隊長であつた。

「これは一体」

「わかりません。ですが」

兵士の一人が言うのであつた。

「彼等が月に行つてしまつたのは事実です」

「ここからか」

「そうです。それは間違いないかと」

そう述べて月を見た。もうそこに三人はいる。だがどうして梯子で月に行けたかというと誰にもわからなかつた。若しかすると神様がもう祖国からも逃れなくなつた彼等の願いを聞き入れたのかも知れない。少なくともこの三人をこの地球を見た者はもう誰もいなかった。これは事実であつた。

月に登った三人 完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1585d/>

---

月に登った三人

2009年3月24日09時22分発行